

訂再  
中等國文典上卷

375.9  
Ni20  
資料室

41836

教科書文庫

4
815
41-1903
20000 14583

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

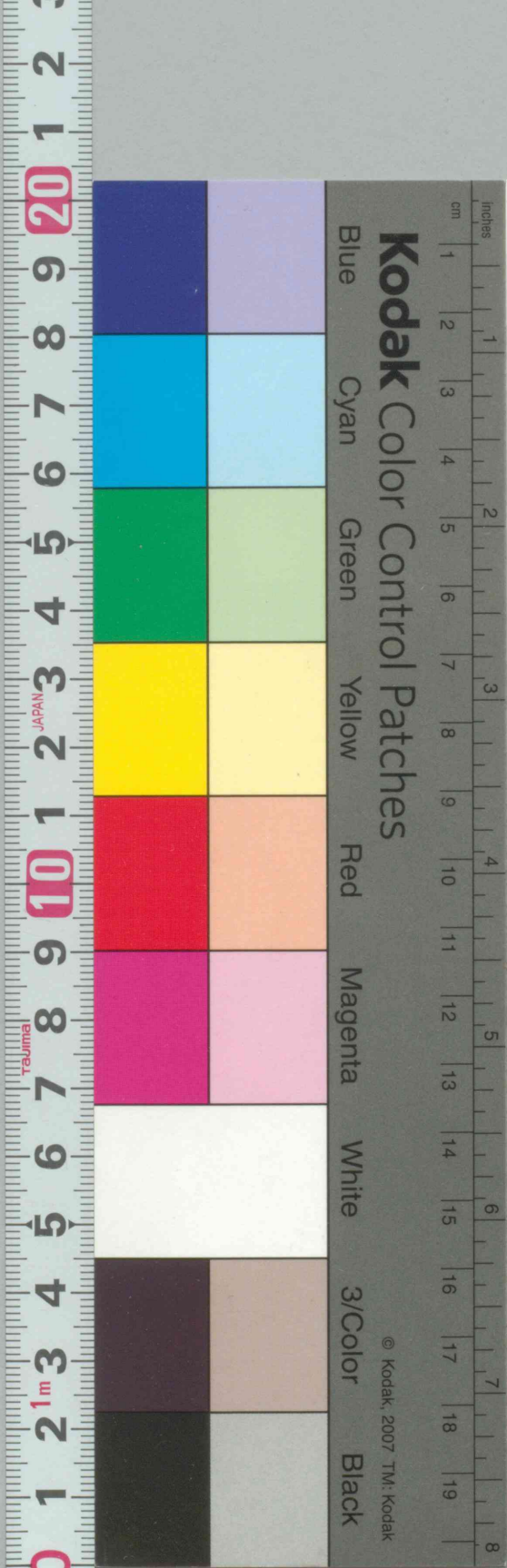


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





明治三十六年一月二十六日

Mi20

文部省檢定濟

再訂  
大正  
圖書

文學士芳賀夫一校閱

三土忠造著述

中等國文典 上卷

東京

合資  
會社

富山房發行



中等國文典序

方今文法書の梓に上れるもの、牛に汗し、棟に充てり。然れども、教科用書として適當なるものに至りては、寥々たること、晨の星の如し。從來世に行はれたる、それがし氏の文典、くれがし氏の語學、其名は教科用書たりと雖、其實は文法に關する一家の研究なり。まゝ教科用のために作りたるものあれども、名だたる大家は、教授の上の經驗なければ、實際の目的には、なほいたく隔りたり。



さればこれ等の書をもちて、生徒に臨むものは、力を勞すること、甚大にして、功を收むること、誠に少し。五年三年文法を學べる生徒の、こちたき名目を覺えたるのみにて、わが文章の誤謬をも正し得ぬは、教授者の罪のみならんや。さらぬだに無趣味がちなる文法の科をば、讀書作文とかけ離れて、いよ／＼無味乾燥に流れしむるは、方今教授上の一通弊にあらずや。

こゝに三土君が中等國文典は、この通弊を濟はんとて物せられたり。君は實際の教育家として、國語の教授を掌れる人なれば、平生の實驗をも

と、して、この書は編まれつるなり。一わたり見たるところにては、術語分類等の上に、獨創の見解を立てられたるふし、いと／＼罕なり。教科用書として、ふかあるべき筈ぞかし。この書に擧げられたる例證の、卑近にして趣味に富める、上中下の卷々の、疎より密に進みて、いはゆる圓周教案といふ方法を採られたる、分解のみに終らずして、總合にも注意せられたる、教科用書としては、大切なる用意に非ざるはなし。余はもとよりこの書を以て完璧なりとはいはじ。然れども一良教科書たりといふに憚らざるなり。



國語の文法には、術語の統一をはじめとして、未定なる問題尙頗多し。これらは皆將來の語學者が熱心なる研究を要すべきものなり。たゞし語學者の研究を採りて直に校堂にのぼすは、慎むべきことなり。今日の如く、文法教科書の皆無に近き時にあたりて、この良教科書を得たるは、かへすくも喜ばしき事にこそ。

明治三十一年四月三日

芳賀矢一識す

## 中等國文典

### 緒言

教科書を物せむとするものは、學術的記述書と、教科書の別を明かにせざるべからず。學術的記述書は、記述すべき材料の性質によりて、其順序組織自から定まるべけれど、教科書は、生徒の讀化力によりて、其順序組織を工夫せざるべからず。一つは既に其智識を有する者に讀ましめ、一つはいまだ其智識を有せざる者に教ふるものなれば、其間に混ぜべからざる區別あるなり。然るに之を混ぜるが、今日の通弊なり。世に稱して教科書といふもの、中には、むしろ、學術的記述書に屬すべきもの、みぞ多かる。殊



に文法の如きは、いまだ不幸にして一部の教科書あるを見ざるなり。

徒にかこつも益なき業なり。いでや自から工夫せむと、内外の諸書を参考して、この頃一草案を起しぬ。これ唯高等師範學校附屬尋常中學校の生徒に教ふべき教案に供せむとの思立なりき。然るに、一人の工夫は偏固に陥る恐あり。之を公にして、廣く世の批評を求め、漸次に改良するころよけれ。且つは斯道のため、一層忠なる所以にあらずや、或人の勸むるまゝに、それも然りと思ひなりて、終に其言に従ひたり。されば思慮尙至らざるふしも尠からざるべし。世の識者幸に是正の勞を惜むなくんば、著者は斯道のために誠に喜ぶ所なり。己の幸は更にも言はず。

本書は閱者の懇篤熱心なる指導によりて、稿を變ふるご數度に及び、大に面目を改めたり。又編纂の順序材料の多少等につきては、畏友佐々木猪六、町田彌平の二氏より有益なる忠言を與へられたること多し。著者は特に其由を書して、永く好意を謝す。

明治三十一年三月十五日

小石川の寓居に於て

著者識す。



## 例言

一、文典といへば、音韻、單語、文章の三篇に分ち、始には總論として國語の性質、言語と思想との關係等を述べ、又單語篇の如きは、一品詞に屬する事共を、すべて一章の下に網羅するが、普通の組織なり。是、學術的記述としては尤適當なる書きざまならむ。但し固より教科書にはあらざるなり。教科書は專、生徒の類化力に順はざるべからざれば、言語と思想との關係、音韻などを始より事々しく載せむことかたし。一品詞に屬する事共を、一章の下に網羅せむことも亦望むべからず。例へば名詞には動詞より來れるあり、形容詞より來れるあり、是等は動



詞、形容詞を學びたる後ならでは解し難し。又動詞の活用、性等を一時に教ふるは、徒に生徒の心を混雜せしめて益なし。故に本書は卷を分ちて上中下三卷をなし、上卷には極めて理解し易きものゝみを載せ、中卷にて之を補綴し、下卷に至りて完結せしめたり。故に之を用ひむものは、必先、三卷を通讀せんことを要す。三卷は固より學年に配當したるにはあらず。唯材料の上より見て區別したるのみ。故に之を三ヶ年に教ふるも、四ヶ年に教ふるも、そは教師の方寸にあり。

一、在來の文典は、多く分解に密にして總合に粗なり。されど分解は寧、總合の方便なり。總合するための分解にあらずや。若分解のみにして止まむには、折角文法を修め

て、其効果は唯假名遣などを覺ゆるに過ぎざるべし。假名遣の如きは文法の枝葉のみ。文章を明瞭に解釋し、綿密なる思想を表出するには、益する所極めて少し。故に本書は總合を重くし、文章篇を委しくせり。

一、文法といふものを根本より考ふれば、今日の分類及び術語には如何はしきもの少からず。されど廣く之を使用せむ人の便を謀り、多くは舊に因りて變更せざる事こそせり。

一、文法の例を古書に取るは、一般の習なり。之がために生徒は解釋に苦しみ、肝心の文法を理會せずして止むこと多し。本書は此弊を避けむと欲し、多く卑近の例を載せたり。されど生徒の熟知せる古文古歌は、却りて多く



之を採れり。是興味を添ふる一法なればなり。又同じ文例を屢用ひたるは、一文章の、文法上各種の方面より見らるゝことを知らしめ、且文例の説明に無益の時間を費さゞらむことを欲してなり。

一、本書は文法を規則として諳記せしめず、歸納的に規則を發見し、演繹的に之を應用せしむる方法によらむことを欲し、規則の前には必、其例を擧げ、更に練習題を加へたり。但、何れも其一斑を示せるに過ぎず。教師は猶種々の適例を與へ、又讀書に作文に常に之を應用して、一層深く練習せしめんことを要す。

再訂中等國文典 上卷

目次

第一章	名詞	一	頁
第二章	代名詞	二	頁
第三章	動詞	四	頁
第四章	助動詞	二	八頁
第五章	形容詞	三	四頁
第六章	副詞	三	九頁
第七章	接續詞	四	三頁
第八章	助詞	四	四頁
第九章	感動詞	四	七頁



第十章 單語の種類……………四八頁

再訂中等國文典上卷目次終



再訂中等國文典 上卷

文學士 芳賀 矢一 閱

三 土忠 造 著

第一章 名詞

○山川 牛馬 學校 義經 辨慶 白黒 夜  
畫 上 下 勉強 等スベテ事物ノ名稱トシテ用ヒ  
ラル、語ヲ名詞ト云フ。

一つ 二つ 三つ 十 百 千 一日 十年 等、數  
ヲアラハセル語モ亦名詞トス。  
次ノ諸文章中ニアル名詞ヲ指摘セヨ。

一、楠正成は忠臣なり。



- 二、東京は日本の首府にして、人口頗多し。
- 三、馬は人を乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
- 四、勉強は幸福の母なり。
- 五、松島宮島、天の橋立を我が國の三景といふ。
- 六、一年には春夏秋冬の四時あり。
- 七、東風吹かば句ひおこせよ梅の花、主なしとて春を忘るな。

### 第二章 代名詞

○我 汝 それ これ ここ かしこ 等ノ語ハ人、物、場所等ヲ指セルモノニシテ、名詞ニ代ヘテ用フル語ナリ。故ニ代名詞ト云フ。

○代名詞ノ中ニテ、我 汝 貴兄 彼 誰 等ハ人ノ

ミニ用フルモノナレバ、**人代名詞**ト云ヒ、これ それ あれ ここ そこ かしこ こち そち あち 等ハ事物、地位、方角ヲ指スモノニテ、之ヲ**指示代名詞**ト云フ。故ニ代名詞ニハ人代名詞、指示代名詞ノ二種アリ。

次ノ諸文章中ニアル代名詞ヲ指摘シ、且、之ヲ分類セヨ。

- 一、余は君を兄上と仰がむ、君は余を弟とも見給へ。
- 二、彼は如何なる人ぞ。
- 三、机の上に讀本をおきたりと思ふに、こゝかしこ尋ねれども見當らず。
- 四、そこにあるは誰の帽子なるか。
- 五、これとそれと能く似たり。



- 六、こゝなる門は誰が門。
- 七、かしこに見ゆるは何の光ぞ、あれは電氣燈の光なり。
- 八、これは誰の落し、金ならん。

### 第三章 動詞

○「鳥飛ぶ」「花咲く」「書を読む」「太郎は眠る」「馬は人を乗せて走り、牛は車を引きて歩む」ノ 飛ぶ 咲く 読む 眠る 乗せ 走り 引き 歩む ハ、事物ノ動作ナイフ語ナリ。此ノ如キ語ヲ動詞ト云フ。

次ノ文章中ニアル動詞ヲ指摘セヨ。

- 一、藝は身を助く。
- 二、月落ち、鳥啼き、霜天に滿つ。

- 三、病起りて後、薬を用ひて病をせむるは養生の末なり。
- 四、この道を知るものは案内せよ。
- 五、書を読み又文を學ぶ。
- 六、よく舅姑に事へ、よく家事を治む。
- 七、新に宮を造りて二皇子を奉じ、還りてその由を申す。

○動詞ハ其末尾種々ニ變化ス。例ヘバ、讀むトイフ動詞ハ

- (一) 書を読む
  - (二) 書を読みたり
  - (三) 書を読む
  - (四) 書を読む
- ノ如ク、ま、み、む、め、の四様に變化す。  
又落つトイフ動詞ハ



(一) 棚より落ちたり  
 (二) 馬より落つ  
 (三) 落つるこゝなし  
 (四) 落つれば危し

ノ如ク ち っ つる つれ ノ四様ニ變化ス。然レ  
 ドモ前ノ讀むトイフ動詞ノ變化トハ異ナリ。斯ノ如ク  
 何レノ動詞モ皆變化スルモノニシテ、其變化ヲ動詞ノ  
 活用ト云フ。

○動詞ノ活用ニ種々アリ。之ニヨリテ動詞ヲ分類スルコ  
 トヲ得ベシ。

○咲く 押す 分つ 習ふ 讀む 去る 等ハ左表ノ  
 如ク變化ス。即、五十音圖ノ四段ニ活用ス。故ニ之ヲ四段

活用ト云フ。

- (一) 咲かきくけ
- (二) 押さしすせ
- (三) 分たちつて
- (四) 習はひふへ
- (五) 讀まみむめ
- (六) 去らりるれ

カクテ其活用ノ行ニヨリ、加行四段活用、佐行四段活用  
 ナドイフコトアリ。以下之ニナラヘ。

○生く 落つ 強ふ 恨む 報ゆ 懲る 等ハ左表ノ  
 如クい列トウ列トノ二段ニ活用シ、更ニウ列ニる、れノ  
 添ハルモノナリ。



○受く 寄す 隔つ 兼ね 覺ゆ 等ハ左表ノ如ク  
 列トえ列トノ二段ニ活用シ更ニう列ニるれノ添ハル  
 モノナリ。

(一)	生 <small>い</small> き	く	くる	くれ
(二)	落 <small>お</small> ち	つ	つる	つれ
(三)	強 <small>お</small> ひ	ふ	ふる	ふれ
(四)	恨 <small>お</small> み	む	むる	むれ
(五)	報 <small>お</small> い	ゆ	ゆる	ゆれ
(六)	懲 <small>お</small> り	る	る	るれ

(一)	得 <small>え</small> ぬ	う	うる	うれ
(二)	受 <small>う</small> け	く	くる	くれ
(三)	寄 <small>よ</small> せ	す	する	すれ

○此二活用ハ共ニ二段ノ活用ナレドモ初ナルハい。列ト  
 う。列トノ二段ニ活キ後ナレハい。列トう。列トノ二段ニ  
 活ク。う。列ヲ中央ト見レバ初ナルハ上ノ二段ナルヲ以  
 テ上二段活用ト云ヒ後ナルハ下ノ二段ナルヲ以テ下  
 二段活用ト云フ。

(四)	隔 <small>へ</small> て	つ	つる	つれ
(五)	兼 <small>か</small> ね	ぬ	ぬる	ぬれ
(六)	教 <small>お</small> へ	ふ	ふる	ふれ
(七)	譽 <small>お</small> め	む	むる	むれ
(八)	覺 <small>お</small> え	ゆ	ゆる	ゆれ
(九)	觸 <small>お</small> れ	る	る	るれ
(十)	植 <small>お</small> ゑ	う	うる	うれ



右三種ノ活用法ニヨリテ、次ナル諸動詞ヲ區別セヨ。

行く 走る 縫ふ 斬る 泣く 降る  
 渡る 消ゆ 祝ふ 學ぶ 起く 翻る  
 放つ 結ぶ 進む 榮ゆ 堪ふ 絶ゆ  
 導く 枯る 占む 喜ぶ 飢う 垂る  
 眺む 望む 囁る 願ふ 食ふ 閉づ  
 加ふ 冷ゆ 積む 崩る 恥づ

○射る 着る 見る ノ如キハ、い列ノ一段ノミニ活用  
 シ、更ニ之ニる、れノ添ハルモノナリ。

- (一) 射 いる くれ
- (二) 着 き きる きれ
- (三) 賣 にくる くれ

- (四) 干 ひ ひる ひれ
- (五) 見 み みる みれ
- (六) 居 ゐ ある むれ

○蹴る トイフ一語ハ、え列ノ け ノミニ活用シ、更ニ  
 之ニる、れノ添ハルモノナリ。

蹴 け ける けれ

○此二種ヲ比較スルニ、射る 着る 見る 等ハ上ノ  
 一段ノミナルヲ以テ上ノ一段活用ト云ヒ、蹴る ハ下  
 ノ一段ノミナルヲ以テ下ノ一段活用ト云フ。

次ノ諸動詞ノ活用ヲ示セ。

似る 持つ 中つ 鑄る 瘦す 亡ぶ  
 寝ぬ 洩る 浮ぶ 恥づ 隠る 見ゆ



○來<sup>ク</sup> ト云フ一語ノミハ、左表ノ如ク活用ス。之ヲ加行變格活用ト云フ。

見る 解く 強ふ 戀ふ 煮る  
來 こ き く くる くれ

○す(爲) おはす(御座) ノ二語ハ、左表ノ如ク活用ス。之ヲ佐行變格活用ト云フ。

爲 せ し す する すれ

○す<sup>ハ</sup> 敬す 服す 説明す 頂戴す 賞賛す 都す 旅す 罪す 等ノ如ク、漢語又ハ名詞等ニ添ハリテ、一語ヲナスヲ以テ、其各語ヲ一動詞ト見レバ、此活用ニ屬スルモノ甚多シ。論ず 減ず 感ず 生ず 投ず 崩ず ノ如ク、濁レルモ亦同シ。是唯發音ノ便利ノ

タメニ濁リタルモノト知ルベシ。

〔注意〕 佐行變格ニハ す(爲) おはす(御座) ノ二語アルノミナレドモ、漢語或ハ他ノ詞ニ、せ し す

する すれ ノ添ヒテ、動詞トナレルハ、皆コノ變格ニ屬セリ。佐行下二段ト混同スルコトナカレ。

漢語若クハ名詞ニ、佐行變格 すノ添ハリテ、一動詞トナレルモノ、三十ヲ舉ゲヨ。

○死ぬ 往ぬ ノ二語ノミハ、左表ノ如ク活用ス。之ヲ寮行變格活用ト云フ。

(一) 死 な に ぬ ぬる ぬれ ね

○あり 居り 侍り ノ三語ハ左ノ如ク活用ス。之ヲ良行變格活用ト云フ。



(一) 有 ら り る れ  
 右ノ表ニヨレバ、良行四段ノ 降る 散る 走る 等  
 ト少シモ異ナル所ナキガ如シ。然ルニ別ニ良行變格ノ  
 名アルハ何故ナルカ。是、散る 降る 等ハ「雨降  
 る」「花散る」ノ如ク、ニテ言ヒ切ルモノニテ、  
 「雨降り」「花散り」ノ如ク、ニテハ言ヒ切ルモノ  
 ニアラズ。之ニ反シテ 有り 侍り ノ如キハ、「臣は  
 此處に侍る」「筆ある」ノ如ク、ニテハ言ヒ切ラ  
 ズ、「臣は此處に侍り」「筆あり」ノ如ク、ニテ言  
 ヒ切ルモノニテ、其活用異ナレバナリ。尙委シクハ中卷  
 ニ至リテ知ルヲ得ン。

○以上學ベル所ニヨリ、動詞ノ活用ニ、九種アルコトヲ知

レリ。即左ノ如シ。

- (一) 四段活用
- (二) 上二段活用
- (三) 下二段活用
- (四) 上一段活用
- (五) 下一段活用
- (六) 加行變格活用
- (七) 佐行變格活用
- (八) 奈行變格活用
- (九) 良行變格活用

○動詞ノ變化スル部分ヲ語尾ト云ヒ、活用セザル部分ヲ語幹ト云フ。



○九種ノ活用中、上一段以下ノ六種ノ活用ハ、其所屬ノ動詞極メテ少ケレバ、常ニ之ヲ暗記スベシ。今便利ノタメ一括シテ左ニ之ヲ舉ゲン。(但シ熟語ノ動詞ハ之ヲ除ク。)

一、上一段活用 ……

射る 鑄る 沃る  
着る 似る  
煮る 放る  
干る  
見<sup>+</sup>る  
居<sup>+</sup>る  
率<sup>+</sup>る

二、下一段活用 …… 蹴る

三、加行變格活用 …… 來

四、佐行變格活用 …… 爲<sup>+</sup>御座す

五、良行變格活用 …… 死<sup>+</sup>ぬ 往<sup>+</sup>ぬ

六、良行變格活用 ……

有<sup>+</sup>り  
居<sup>+</sup>り  
侍<sup>+</sup>り

○動詞ノ活用ハ誤リ易キモノナリ。右ニ舉ゲタル六種ノ活用ニ屬スル語ハ、常ニ暗記スベシ。唯混ズル恐アルハ四段、上二段、下二段ノ三種ナリ。今之ヲ識別スル法ヲ述ベシ。

(一) 咲<sup>+</sup>かす 讀<sup>+</sup>ます ノ如ク打消ノ意味ヲ表スニ、お列ヨリず。ニ續クモノハ、四段活用ノ動詞ナリ。

(二) 落<sup>+</sup>ちす 起<sup>+</sup>きす ノ如クい列ヨリず。ニ續クモノハ上二段活用ノ動詞ナリ。

(三) 捨<sup>+</sup>てす 受<sup>+</sup>けす ノ如クえ列ヨリず。ニ續クモノハ、下二段活用ノ動詞ナリ。



右ノ規則ニヨリ、次ナル動詞ノ何種ノ活用ニ屬スル  
カヲ示セ。

持つ	垂る、	消ゆる	滿つる	見ゆる	凍ゆる
勸むる	解くる	破る、	止むる	浮ぶ	恥づる
瘦する	缺くる	閉づる	報ゆる	調ぶる	起くる
割る、	集むる	集まる	詰むる	焼くる	借る
射る	膨る、	締むる	試る	惟る	謹む
霽る、	曇る				

左ノ口語ヲ文章ニ改メヨ。

- 一、向うに見ゆるのは山だ。
- 二、恩を受けたるときは必報いるがよい。
- 三、手足の冷える人は貧血性だ。

- 四、能く覺える生徒は教師に譽められる。
  - 五、名を廣めるは善けれども、強ひて求めるは善くない。
  - 六、家内の者が早く起きるのは家が榮える基だ。
  - 七、稻を植ゑる女を早乙女サチメといふ。
  - 八、燃えるものは薪と石炭との外にも澤山ある。
  - 九、捨てる命は持たないけれども、君に捧げるならば惜しくない。
  - 十、恥ぢる事を知つて居る人は善人だ。
  - 十一、覺えるのもむつかしいが、教へるのもむつかしい。
  - 十二、此子は母に似て居る。
  - 十三、過つて直に改めるは勇氣のある人だ。
- 動詞活用ノ假名遣ハ誤リ易キモノナリ。 教ウ 用ユ  
恥チづ 植ウう ノ如ク、口語ニテ言フ音ト、實際ノ假名



ト異ナルモノハ暗記シオク外ナシ。

次ノ諸文章中ナル○ヲ填ムルニ、如何ナル假名ヲ用フベキカ。

- 一、聞くは易し覺○るは難し。
- 二、民富みたらば國も自から榮○べし。
- 三、飢○たる人に食を與ふ。
- 四、習ひたることを忘るゝは、耻○べきことなり。
- 五、知りて答○ること能○ざるは臆病なり。
- 六、昔戸を閉○て勉強したる學者ありき。
- 七、恩を受けば必報○よ。
- 八、智者は治に○て亂を思ふ。
- 九、稻を植○るは六月の頃なり。

- 十、己がなし得ざることは人に強○べからず。
- 十一、誠に歡喜に堪○ざるなり。
- 十二、時計の針のた○まなく。

次ノ諸文章中ニアル假名遣ノ誤ヲ正セ。

- 一、恩を受けば必報ふべし。
- 二、爲朝數十騎を率いて都へ上る。
- 三、髪ゆいも一つの職業なり。
- 四、知らざることば問いて明むべし。
- 五、一度教えられたることは忘るべからず。
- 六、若きとき學ばぬ悔ひをかみしむる奥齒なきまで身は老ひにけり。

七、祝え諸人諸共に。



八、親として子を思わぬは絶へてなし。

九、子なければ家は絶ふるなり。

十、門閥の賤しきは恥するに足らず。

十一、飢へ凍へても武士は武士。

十二、落武者芒の穂におす。

十三、蒔かぬ種ははへぬ。

十四、盲目蛇におしず。

十五、怜悯なる頭には閉じたる口あり。

○動詞ハ事物ノ動作ヲ表ス語ナリ。動作ノ起ルニハ必、之ガ主トナル事物ナカルベカラズ。例ヘバ「花咲く」「鳥啼く」ノ如ク、咲く 啼く ト云フ動作ハ花鳥アリテ起ルナリ。即、花、鳥ハ 咲く、啼く ト云フ、動作ノ主

トナルモノナレバ、「花咲く」ト云フ文章ニテハ花ヲ其主語ト云ヒ、「鳥啼く」ト云フ文章ニテハ鳥ヲ其主語ト云フ、而シテ 咲く 啼く ヲ其説明語ト云フ。

○スベテ文章ニハ主語ト説明語トアリ。「猫眠る」「犬走る」「山見ゆ」「花散る」ノ如シ。

○然ルニ「太郎讀む」「馬喰ふ」「私は書く」「學校は募る」ノ如キハ主語モ説明語モ、共ニ備リ居レドモ、何ヲ讀ムカ、何ヲ喰フカ、何ヲ書クカ、何ヲ募ルカ。其事物ヲ言ハザレバ意義未ダ十分ナラズ。

太郎、本を讀む。 馬、草を喰ふ。  
私は手紙を書く。 學校は生徒を募る。

ノ如クニシテ、始メテ十分ノ意義ヲナスベシ。カ、ル場合



ノ、本 草 手紙 生徒 ハ、動作ヲ受クル客體ナル  
ガ故ニ、客語ト云フ。

○故ニ文章ニハ左ノ二種アルコトヲ知ル。

一、主語ト、説明語トヨリ成ルモノ、

二、主語ト、客語ト、説明語トヨリ成ルモノ、

○主語及客語トナルベキモノハ、主トシテ名詞及代名詞  
ニシテ説明語トナルモノハ、動詞ナリ。(其他ニモアレド  
モ、後ニ至リテイハン)。

次ノ文章中ニアル主語ト客語ト説明語トヲ指示セヨ。

一、火燃ゆ。

二、小供眠る。

三、下女は水を汲む。

四、犬人を噛む。

五、生徒は文法を習ふ。

六、牛車を引く。

七、馬が走る。

八、私は本を讀む。

九、鳥餌を求む。

十、父、子を愛す。

○斯ク客語ヲ要スルト要セザルトハ、動作ノ性質ニヨル  
ナリ。即 燃ゆ 眠る 走る ノ如キハ其動作ヲナス  
ニ、動作ヲ起スモノ、外、他ノモノヲ要セザレドモ、  
讀む 噛む 習ふ ノ如キハ、讀まる、噛まる、  
習はるゝもの、ナクテハ起ラザル動作ナリ。  
一ハ他物ニ及バザル動作ナレバ自動性ノ動作ト  
云ヒ、自動性ノ動作ヲ表ス動詞ヲ自動詞ト云フ。  
一ハ他ニ及ス動作ナレバ他動性ノ動作ト云ヒ、他  
動性ノ動作ヲ表ス動詞ヲ他動詞ト云フ。

○自動、他動ヲ動詞の性ト云フ。



次ニ舉ゲタル諸動詞ノ性ヲ區別セヨ。

學ぶ 受く 取る 消す 打つ  
 賞む 授く 言ふ 思ふ 消ゆ  
 來(く) 蓄む 笑ふ 泣く 告ぐ  
 攻む 指す 示す 教ふ 聞く  
 冷ゆ 榮ゆ 報ゆ 用ふ 植う  
 降る 光る 曇る 飛ぶ 行く

○同シ動詞ニテモ、用法ニヨリテ、自動性トモ他動性トモナルモノアリ。左ノ數例ヲ見テ知ルベシ。

開く 戸を開く自  
 吹く 風を吹く自  
 引く 後へ引く自  
 増す 水を増す他  
 笛を吹く他

笑ふ 人が笑ふ自  
 人を笑ふ他

〔注意〕 同シ漢字ヲ用ヒタル動詞モ活用異ナレバ性モ亦異ナルコト多シ。

次ナル諸動詞ノ性ヲ區別シ、兩性ヲ有スルモノハ各其活用ヲ示セ。

換ふる 起く 切る 残る 沸く 寄る 掘る 悲む  
 乗る 退く 浮ぶ 立つ 落つ 過ぐ 違ふ 遣る  
 盡く 亡ぶ 別つ 似る 見ゆ 倒る 解く 積む  
 出づ 明く 摩る 揺る 消ゆ 進む 抜く 答ふ  
 枯る 崩る 流る 入る 締む 慰む 忘る 向く  
 焼く 沈む 移る 散る 書く 並ぶ



### 第四章 助動詞

○「球を受けらる」「牛に車を引かしむ」「人に頼まる」「花咲きたり」「三年飛ばす鳴かず」「早く行くべし」「人は言ふなり」「狩りに行きけり」「ノ たらる しむる たり ず べし なり けり 等ハ、助動詞ノ意味ヲ助クルタメニ用フル語ナリ。故ニ之ヲ助動詞ト云フ。

○助動詞ニモ語尾ノ活用アリ。其活用ハ助動詞ノニ類スルモノ多シ。

- (一) 下二段活用ニ等シキモノ
- |      |      |     |      |      |
|------|------|-----|------|------|
| 受けらる | 讀まる  | 言はす | 受けさす | 言はしむ |
| 咲きつ  | ノ如キ、 | る   | らる   | す    |
|      |      | る   | らる   | さす   |
|      |      | る   | らる   | しむ   |
|      |      | る   | らる   | つ    |

ノ六ツハ、下二段活用ト同シキ活用ヲナス。即左ノ如シ。

- |     |    |    |     |     |
|-----|----|----|-----|-----|
| (一) | れ  | る  | る   | る   |
| (二) | られ | らる | らる  | らるれ |
| (三) | せ  | す  | する  | すれ  |
| (四) | させ | さす | さする | さすれ |
| (五) | しめ | しむ | しむる | しむれ |
| (六) | て  | つ  | つる  | つれ  |
- (二) 良行變格活用ニ等シキモノ
- 「花咲きたり」「書を読むなり」「書を読みけり」ノたりなりけりノ三ツハ良行變格ト等シキ活用ヲナス。即左ノ如シ。
- (一) たら たり たる たれ



- (二) なら なり なる なれ
- (三) けら けり ける けれ

(三) 奈行變格活用ニ等シキモノ

○「花咲きぬ」「鳥啼きぬ」ノ ぬ ハ奈行變格活用ト等シキ活用ヲナス。

- (一) な に ぬ ぬる ぬれ ね

(四) 形容詞ニ等シキ活用ヲナスモノ

○「花咲くべし」「鳥啼くまじ」ノ べし まじ ノニツハ形容詞ト等シキ活用ヲナス。

- (一) べく べし べき べけれ
- (二) まじく まじ まじき まじけれ

○此外ノ助動詞ハ三段ニ活用スルモノト二段ニ活用ス

ルモノトアリ。

(五) 三段ニ活用スルモノ

○「花咲きき」「花咲かず」ノ き ず ノニツハ三段ニ活用ス。

- (一) き し しか
- (二) ず ぬ ね

(注意) コノニツハ其活用他行ニワタレリ。

(六) 二段ニ活用スルモノ

○「花咲かむ」「鳥啼くらむ」ノ む らむ ノニツハ二段ニ活用ス。其狀四段活用ノ下半ニ似タリ。

- (一) む め
- (二) らむ らめ







### 第五章 形容詞

○「高き山」「深き川」「善き生徒」「富士山は高し」「日本海は深し」「彼の行は善し」ノ 高き 高し 深き 深し 善き 善し ノ如キハ事物ノ有様ヲ形容シテイフ語ナリ。故ニ之ヲ形容詞ト云フ。

○形容詞モ亦動詞ノ如ク語尾ヲ變化ス。其變化ハ左ノ如シ。

○ ふ 深 か	た 高 か	ご 遠 ほ	た 高 か	ふ 深 か	く	し	き	けれ
		ご 遠 ほ						

ノ如ク變化セザル部分ヲ語幹ト

云ヒ、變化スル部分ヲ語尾ト云フ。

○悪し 嬉し 悲し ノ如ク語幹ニ し ヲ含メルモノハ第二段目ノ活用ニ於テハしヲ添ヘズ。

悪し	嬉し	悲し
く	○	き
		けれ

○又 活潑なる少年 公平なる官吏 あはれなる小女 巧なる手品師 皎々たる明月 滔々たる大河 峨峨たる峻山 ノ如ク他語ニ なる 又ハ たる ノ添ヒテ形容詞トナレルモノ多シ。而シテコノ類ノ形容詞ハ漢語ヨリ來レルモノ最モ多シ。

○なる たる ハ元來助動詞ニシテ其ノ活用ハ前ニ述



ペタルガ如シ。故ニ此類ノ形容詞ノ語尾ハ、なる たる  
ト同シ活用ナルコトヲ知ルベシ。例ヘバ、

一、彼の少年も今少しく活潑ならば善けれども。

彼の少年は活潑なり。

彼は活潑なる少年なり。

彼は活潑なれども。

二、明月皎々たらん。

明月皎々たり。

皎々たる明月。

明月皎々たれども。

次ナル諸文章中ノ形容詞ヲ指摘セヨ。

一、小さき家の側に、太き松の木あり。

二、家貧しき者は志却りて固し。

三、巍々たる高山後に聳え、茫々たる大洋前に開く。

四、苦しき事に耐へずば、樂しき事もあるまじ。

五、弱きを扶け、強きを挫く。

六、健全なる精神は健全なる身體にやどる。

七、山高きを以て貴しとせず、木あるを以て貴しとす。

八、鮮血淋漓たれども、喇叭の音は依然として嘯唳たり。

九、良薬は口に苦しといふは善き諺なり。

十、祝ふ今日こそ樂しけれ。

十一、人多き人の中にも人はなし。

十二、我が雪と思へば、輕し笠の上。

十三、允文允武なる我が君は、明治中興の大業を成したまひぬ。



十四、高きも卑しきも老いたるも若きも皆同じ心にぞ見えける。  
次ナル文章中ノ助動詞ヲ指摘セヨ。

- 一、梅の花は咲きたれども鶯は未だ來り鳴かず。
- 二、昨日は遠足會にて上野に行きたり。
- 三、花咲きたれど見る人もなし。
- 四、牛に引かれて善光寺參り。
- 五、小兒に本を讀ましむるは何よりも大切なり。
- 六、知らぬことは知らずと答ふべし。
- 七、今日は天長節なれば楽しく遊ばん。
- 八、散るべき時に散るが花。
- 九、今日はよく勉強したれども作文を清書することを忘れたり。
- 十、中納言を斬り奉りし本間三郎といふものぞ只一人臥したり。

ける。

十一、返すく戒められても聞かざりしかば遂には世に用なきものになり果てぬ。

十二、終日何事もなすことなくて過ぎけり。

十三、是は先年長くも六波羅攻のありし時下したまひし繪旨なり。

### 第六章 副詞

○「必行くべし」「靜に走れ」「最も強き動物」「いと短き竹」  
 ノ 必 靜に 最も いと ノ如キ語ハ、動詞或ハ形容  
 容詞ニ副ヒテ其意味ヲ限定スルニ用フルモノナリ。右  
 ノ例ニテハ 必 靜に ハ動詞ニ添ヒ、最も いと  
 ハ形容詞ニ添ヒタリ。斯ノ如キ語ヲ副詞ト云フ。副詞ハ



副詞 動詞 形容詞

又「いと靜に言へり」「最も早く走る」ノ「いと」最も  
 ノ如ク、他ノ副詞ニモ副詞ニテ、其意味ヲ限定スルコトア  
 リ。故ニ副詞トハ、動詞形容詞及ヒ他ノ副詞ニ添ヒテ、其  
 意味ヲ限定スル語ナリ。

早く 軽く 能く 等ハ形容詞ナレドモ、「犬を軽く  
 撃つ」「馬が早く走る」「彼は能く勉強す」ノ如ク動詞  
 ニ添フトキハ副詞トナルコト多シ。又「此菊の花は珍  
 らしく大なり」「かゝる事は全くなし」ノ如ク形容詞  
 ニモ添フコトアリ。

又 巍然として聳ゆ 怫然として怒る ノ如ク、漢語  
 ニ として ノ添ヒテ副詞トナルモノ多シ。

次ノ文章中ニアル副詞ヲ指摘セヨ。

- 一、賢き人必長命すとも限らず。
  - 二、屢戒められても尙改めざる者あり。
  - 三、聞く者泣然として涕落さぬはなかりき。
  - 四、河水滔々として去つて歸らず。
  - 五、夙に起き夜に寐ね能く勉強せば賢き人となるべし。
  - 六、馬は人を乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
  - 七、王勃然として色を變ず。
  - 八、能く遊び、又能く學ぶべし。
  - 九、天油然として雲を起し、雨將に沛然として至らんとす。
  - 十、暫く會はざる間に、痛くやつれたまへり。
  - 十一、唯泣くより外の事ぞなき。
- 右ノ諸例ハ、直チニ動詞、形容詞又ハ他ノ副詞ニ添ヒタ  
 ル場合ナレドモ、副詞ハ又數語ヲ隔テ、動詞、形容詞ノ



意味ヲ限定スルコトアリ。例ヘバ「能く書を読む」別  
に變りたることもなし。ノ如シ。前後ノ意味ニヨリテ  
其限定セル語ヲ考フベシ。

次ノ文章中ニアル副詞ヲ指摘シ、且其限定セル語ヲ  
示セ。

- 一、多く古人の書を読む。
- 二、夙に凡兒に秀でたり。
- 三、能くむづかしき問題を解く。
- 四、廣く眼を放つて宇内の形勢を考ふ。
- 五、今は果報も盡き果てたり。
- 六、れよ。暫御心を静めおはしおして、重盛が申し状を具に聞こしめさ

- 七、天下靡然として風をなす。
- 八、いづぞや先生に聞きしことを思ひ出せり。
- 九、毎年一度船を遣さんと約束せり。
- 十、今更往事を悔ゆとも詮なかるべし。
- 十一、彼は必ず一度決心したる事をば斷行す。
- 十二、誠に尤らしく申すにつけても、彌名残ぞ惜しき。

### 第七章 接續詞

○「能く學び又能く遊ぶ」「雨降り且風吹く」知りてなさ  
ざりしか抑忘れたりしか」ノ 又 且 抑 ノ如キ  
ハ、文又ハ語句ヲ接續スル語ナリ。故ニ之ヲ接續詞ト云  
フ。



次ノ文章中ニアル接續詞ヲ指摘セヨ。

- 一、書を讀み又文を學ぶ。
- 二、此筆は書にも宜しく亦畫にもよろし。
- 三、文を學び或は武を研く。
- 四、重盛は君に忠を致し且父に孝を竭せり。
- 五、日本及支那は東洋の帝國なり。
- 六、かくなり行くは天命か、はた自から招く所か。

### 第八章 助詞

○「馬に騎る」「机に向ふ」「馬を走らす」「書を讀む」「馬は人を乗す」「人も言ひ我も思ふ」「忠と孝と何れか重き」  
 ノにをはもこかノ如キハ、名詞、動詞、形

容詞等ノ間ニ加ハリテ、其關係ヲ定ムル語ナリ。例ヘバ  
 人 本 ノ二名詞ト與ふノ一動詞トアリトセンニ、唯  
 人 本 與ふ トノミアリテハ其意通ゼズ。其ノ間ニ  
 に を ヲ加ヘテ、「人に本を與ふ」トナシテ、始メテ  
 人ト本ト與ふト云フ動作トノ關係ヲ明ニシ、意味モ亦  
 定マルガ如シ。此種ノ語ハ其數甚多シ。之ヲ總稱シテ助  
 詞ト云フ。所謂てにをは是ナリ。

○助詞ハ活用セズ。今最普通ナル助詞ヲ左ニ舉ゲン。

が の に を へ と より から まで  
 は も さへ すら だに ばかり のみぞこそ  
 ば ども とも や か

次ノ文章中ニアル助詞ヲ指摘セヨ。



- 一、人、犬を飼ふ。
- 二、蝶、花の上に戯る。
- 三、新橋までは馬車にて行き、新橋よりは汽車にて行かむ。
- 四、わが本分をだに盡さぬ人の多きぞかし。
- 五、是ぞ吾が身の幸なる。
- 六、犬すら尙主恩を知る、人にして犬に如かざるべけむや。
- 七、汝は誰の子なるか。
- 八、君のためには家をも身をも願みるべきにあらず。
- 九、かくすればかくなること知りながら止むに止まれぬ大和魂。  
(吉田松陰辭世の歌)
- 十、ながらといふもつゝといふも同じ意味なりや。

○種々ノ詞ノ關係ハ、助詞ニヨリテ定マルモノナレバ、注

意シテ其意義ヲ明ニスベシ。

### 第九章 感動詞

○「あゝ悲し」「面白きかな」「あな恐しや」「あはれ今年の秋も過ぎたり。」等ノ「あゝ」「かな」「あな」「や」「あはれ」ノ如キハ、感動シタルトキニ發スル詞ナリ。故ニ之ヲ感動詞ト云フ。

次ノ文章中ニアル感動詞ヲ指摘セヨ。

- 一、あゝ忠なるかな、孝なるかな。
- 二、いざ之より出立仕らむ。
- 三、あなあさましの世や。
- 四、やあやあ、汝も敵の子分か。

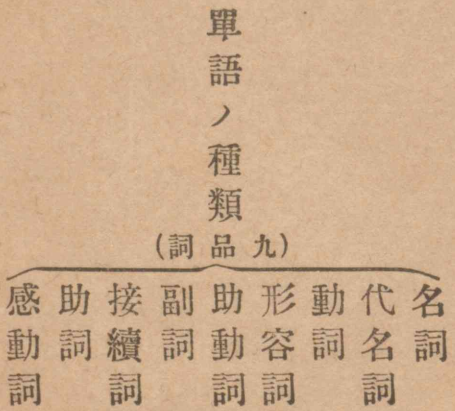


- 五、まごかにめぐれよ、やよ子供。
- 六、すは一大事とかけ出したり。
- 七、忠と孝とは片時も忘るべからざることぞかし。
- 八、いで一うちと勇み立つ。
- 九、あな嬉し喜ばし。
- 十、嗚呼忠臣楠子の墓。

### 第十章 單語の種類

○以上學ビタル所ニヨリテ、吾人が毎日使用セル言語ニ  
 ハ、九種ノ別アルコトヲ知レリ。  
 ○「馬」「牛」「行く」「走る」「美し」「善し」「けり」「たり」等  
 一語一語ヲ單語ト云ヒ、單語ノ一種類、即名詞代名詞等

ヲ品詞ト云フ。故ニ國語ニハ九種ノ品詞アリト知ルベ  
 シ。即チ左ノ如シ。



左ノ諸文章中ニアル單語ノ品詞ヲ區別セヨ。

- 一、人は萬物の靈なり。
- 二、朱に交れば赤くなる。



- 三、日本男兒の村田銃彈丸命中類なし。
- 四、書を読み、又文を學ぶ。
- 五、盲目蛇に怖ぢず。
- 六、其處に居るは誰ぞ。
- 七、馬は人を乗せて早く走り、牛は車を引きて遅く歩む。
- 八、我こそは參議經盛の三男無官の大夫敦盛なれ、早々首をうたれよと、西に向ひて手を合はす。
- 九、朝は五時に起き、夜は十時に臥し、働く時は勞を嫌はず。
- 十、京都は、山水の景色に富める處なり。
- 十一、松島、天の橋立、宮島を日本三景といふ。
- 十二、北條氏八十萬の兵を率ゐて金剛山の城を攻む。
- 十三、惜まれて散るを櫻のほまれかな。

- 十四、歩まば歩まれしを、人に勸められて車に乗りぬ。
- 十五、今に至りて悔ゆれども、齡既に傾きたり。
- 十六、父母なき人は如何に悲しからむ。
- 十七、平重盛は忠且孝なる人なりき。
- 十八、高き屋に登りて見れば、烟立つ民のかまどは賑ひにけり。
- 十九、和歌のうらわに夕潮滿ち來れば、岸の群鶴葦邊に鳴き渡る。
- 二十、敷島の、大和心を人間は、朝日にはふ山櫻花。



發兌元

(明治廿九年六月設立)



著述者 發行所 代表者 印刷者 印刷所

三土忠造  
東京市神田區裏神保町九番地  
合資會社 富山房  
合資會社 富山房社長  
東京市日本橋區藥研堀町三十三番地  
仁科衛  
同所  
厚信舍  
富山房  
電話浪花一四六番  
電報號碼 (ヤマフ)

明明明明明明  
治治治治治治  
三三三三三三  
十十十十十十  
六六六五五四一  
年年年年年年  
三一一九九二四  
月月月月月月  
廿廿十十十十  
十五二七四八六  
日日日日日日  
再再再再訂發  
訂訂訂訂正  
廿廿廿廿十  
五四四三三  
版版版版版  
印刷發印發  
發行刷行刷行

上卷	正價金貳拾貳錢
中卷	正價金貳拾貳錢
下卷	正價金貳拾貳錢

Handwritten mark resembling 'RV' or 'R' with a checkmark.

Handwritten mark resembling 'RV' or 'R' with a checkmark.

Handwritten mark resembling 'RV' or 'R' with a checkmark.

H. M. S.

K. S.

Handwritten mark resembling 'RV' or 'R' with a checkmark.

Handwritten vertical characters, possibly '漢中'.





